



「命とは―悲しさと嬉しさに触れて―」

岩出市立岩出中学校 二年 鎌田 琉夏

命は尊いもの。命は大切に守らなければいけないもの。それは、分かる。しかし、何がどう尊いのか。私は分からない。

小学三年生の時に、祖父は亡くなった。当時の私は、祖父がこの世からいなくなったということの意味が分からず、ただ茫然と突っ立っていた。はつきりと覚えている。真夜中、母に起こされ、大急ぎで病院へ向かった。祖父の病室に駆け込むと、眠っているような祖父、医師と何人かの看護師、そして、泣いている祖母の姿が目に見え込んだ。何も分からず、祖母が泣いているのは初めて見たな、なんて呑気に驚いていたような気がする。「祖父が亡くなった。」そう聞かされると、おかしい気持ちになった。身近な人が亡くなるというのは初めてだったから。自分でも不思議なくらいに、全く涙は出なかった。簡単に信じられなかった。信じられなかった。ただ眠るようにそこにいる祖父の手は、あたたかくて……。「何で」「どうして」疑問しか沸いてこなかった。そして、一粒も涙をこぼさない自分は、

なんて非情なやつなんだ、と怒りが込み上がった。しかし、なぜだろう。もう五年もたった今となって、祖父のことを考えると、涙が止まらない。祖父が病気になる前の元気な姿と、笑顔が脳裏にゆらゆらと浮かび上がっては、消え、ただただ涙が溢れる。命が失われるということは、これ以上ないくらい、悲しく、つらいことだと心から思う。

しかし、命あるものは必ず死ぬ。それは、どんなに悲しく、つらいものであっても、受け入れなければならないことだ。だけど、父がよく言うことがある。それは、人は二度死ぬ、ということだ。一回目は、心臓が止まって、もう二度と動かなくなつた時。いわゆる、肉体的な死。対して二回目は、人々の記憶からその人が忘れ去られて、もう二度と思ひ出されなくなった時。いわゆる、忘却の死だ。一回目の死は、誰にも避けることはできない。けれど、二回目の死は、その人自身や人々によって避けられるのではないかと私は考える。人々に忘れ去られるとい

と。このことを心に留めて、私は明日を生きていこうと思う。

講評

祖父の死と親戚の赤ちゃんの誕生を通して、「いのち」の尊さについて考えている。人の死は二度ある。一度目は心臓が止まった「肉体的死」で、二度目は人の記憶から無くなる「忘却の死」。祖父は自分の心の中で生きており、二度目の死は迎えていない。そう考えると死の悲しみは和らぐ。親戚の赤ちゃんを抱いて新たな「いのち」の誕生の喜びを感じた。二つの体験を通して「いのち」を多面的に捉え、結論に結びつけることができている。



うことは、肉体的な死よりも、さらに悲しく、つらく、怖いものだと思った。祖父は一回目の死を迎えたけれど、二回目の死はまだ迎えていない。私の心の中で生きているから。そう考えると、祖父の死の悲しみが少し、和らいだような気がした。けれど、命は悲しいだけじゃない。命ってあたたかくて重いんだな。親戚の赤ちゃんを抱えて思った。怖いからと遠慮していたが、すすめられて抱いてみると、その子はとても静かに、私の腕の中に収まった。あつたかいなと思った。少し重いけれど、その重さは何だか特別なもののように感じて、不思議な気持ちになった。小さくてかわいらしい、その新しい命を抱いていると、緊張していた私の顔も、思わずほころんだ。赤ちゃんの周りは幸せそうな雰囲気、すごく心が穏やかになった。そして、新しい命がもたらす幸せは、非常に大きいものだと思つた。新しい命が誕生するということは、これ以上ないくらい、嬉しく、幸せなことだと心から思う。

命とは不思議に満ちている。命の何がどう尊いのか。はつきりした答えは、このような体験を通して、私は分からない。だけど、少し答えに近づいたように思う。命とは、悲しくて、嬉しくて、弱くて、強いもの。これまでもこれから、命は尊いものだし、大切に守らなければいけないものだ。そして、誰だって死んでしまふけれど、その人を忘れない限り、生き続けること。また、新しい命がもたらす幸せは、とてつもなく大きいこ